

防災・減災に思う(その4)



(株)ファルコン

出口 明夫

Deguchi Akio

(建設部門)

○異常自然災害の時代

今年も7月の西日本豪雨、台風上陸数5個、6月の大阪府北部地震、9月の北海道胆振東部地震、さらに、全国的な記録的猛暑等、多くの自然災害が発生した。

西日本豪雨では11府県に「大雨特別警報」が出されるとともに、気象庁は記者会見で「記録的な大雨となる恐れ」、「過去に例を見ない大雨のパターン」など、再三最大限の警戒を呼びかけたが、その切迫感が自治体や住民には十分に伝わらなかったのか、死者220名を超える「平成最悪」の広域豪雨災害となった。

今回の豪雨は1時間に50ミリ以上の非常に激しい雨が、広い範囲で長い時間、降り続いたというのが特徴。24～72時間に降った雨の量が、まれに見る大きさとなった。その結果、広島市の土砂災害、愛媛県肱川の急激な集中豪雨とダム放流、岡山県倉敷市真備町の河川氾濫などそれぞれ災害形態は異なるが、いずれも多く犠牲者と甚大な被害が発生した。

大阪北部地震では、最大震度6弱が、朝の通勤ラッシュを直撃した結果、交通網のマヒ、運転再開の遅れ、ライフライン(ガス・水道)の被災、ブロック塀の倒壊による2名の犠牲者等々が発生した。6弱程度の揺れで様々な「想定外」が浮かび上がった都市災害であった。

北海道胆振東部地震は、9月6日に、北海道胆振地方中東部を震源として発生した地震で、地震の規模はM_j 6.7、最大震度は、震度7で、北海道では初めて観測された。

死者41人 負傷者681人 住家の全壊186棟、半壊539棟

この地震の特徴は、まず、震源に近い厚真町を中心に強震動によって大規模な崖崩れが広範囲で発生し、多数の住宅が巻き込まれたことである。厚真町吉野地区では山と寄り添って暮らす13世帯が約1キロにわたる土砂崩れで住民34人のうち実に19人が亡くなった。

次に、北海道内全域停電(ブラックアウト)が発生したことである。1951年の北海道電力創設以来初の出来事らしい。この地震により道内の半分の電気を供給していた苫東厚真火力発電所が完全に停止したことにより、連鎖的に他の発電所も停止し、北海道・本州間連系設備の送電も止まった。この結果、道内全域約295万戸で停電が発生した。この地震によって北電の発電設備および系統連携設備の脆弱性が暴露されたといえる。

全電力喪失による住民生活やあらゆる産業への影響は非常に大きかった。

まず、数多くの電気器具で生活している住民の不便、スマホの電池切れによる情報不足、病院の診療に支障。農業面では、酪農家や牛乳工場での生乳の廃棄、搾乳ができず乳房炎が多発し、死亡する乳牛も発生した。また、交通運輸面では、新千歳空港や鉄道貨物が全面ストップ、トラック運送についても信号機が復旧せず安全確保のためストップし、物流が途絶えたこと等々。

今さらながら、電気の重要性、ありがたさを知らされるとともに、電気事業の防災対策において「想定外」を起こさないよう、あらゆる角度からスキのない再点検の必要性を感じさせられた。

近年、台風やゲリラ豪雨、竜巻などの気象災害、土砂災害が頻発している。地球温暖化が進むと、集中豪雨が多くなると同時に、台風が巨大化するといわれている。また、台風の進路コースは、従来は夏から秋にかけておおよそその進路コースが決まっていたが、10年～20年ぐらい前から変則コースの台風が少しずつ増えてきていると思われる。今年も台風12号は日本列島を東から西へ進む極度の異常コースであった。

また、年々夏の暑さが厳しくなっているが、今年の猛暑は全国的に特に凄まじかった。埼玉県熊谷市で41.4度の国内最高気温を記録し、猛暑による熱中症で多くの人が死亡するほどであった。

さらに、気候の変動は夏の暑さだけでなく、暖冬も進んでいる。また、いつの頃からか春と秋の良い気候の時期が徐々に短くなっている感じがする。明らかに気候が変動しており、今後ますます従来と違った異常な気象災害が増大して来ると思われる。

ただ、被災の要因は物理的な気象現象の変化だけではなく、人為的な要因で被害をより大きくしてしまったことも考えられる。例えば、一定の安全が確保されていることで安心し、その環境に慣れてしまっていたところ、一定以上の異常気象に遭遇し、なす術もなく命の危険にさらされるケースなどである。文明の恩恵に浸り過ぎて、人間本来の本能的な自然への対応力を失っているような気がする。

阪神淡路大震災以降、日本列島は地震、火山噴火等が頻発する大地の動乱が続いているうえに異常気象現象が常態化しつつあり、もはや日本列島には「安全な場所」はどこもない、との認識のもと一人ひとりが自然との向き合い方や防災への関心をより高める必要があるのではなかろうか。

☆

○南海トラフ地震に関連する情報

気象庁では昨年11月1日から、南海トラフ全域を対象として、巨大地震の前触れの可能性がある地震や異常な現象を観測した場合及び巨大地震発生の可能性が相対的に高まっていると評価した場合等に「南海トラフ地震に関連する臨時情報」の発表を行うという新制度がスタートされている。

しかし、「臨時情報」が出た場合の防災対応の基本方針やガイドラインは自治体に対しても示されていない。

今、政府の中央防災会議では、静岡県、高知県、名古屋など中部経済圏の3つの場所をモデル地区に選び、自治体や企業に対し「臨時情報」が出たらどうするかの聞き取り調査や地域住民を巻き込んだワークショップなどの結果をもとに専門家による検討会が行われている。この検討結果をもとに政府としてガイドラインを作れるか検討する方針のようである。

「臨時情報」は、あくまでも「お知らせ」であって、住民や企業に拘束力のある指示や警告を出すものではないらしい。政府や自治体のガイドラインが策定されていない今のままで「臨時情報」が出たら、どう判断し、どう行動するかは、個人も企業もあくまで自分自身で決めなければならない。防災においては、「自分の身は自分で守る」が基本であり、「臨時情報」が出れば、まずは、非常事態の到来を覚悟するとともに、速やかに避難するべきか否かを決断したうえで、改めて家具の固定、避難場所・避難経路の確認、家族との役割分担や安否確認手段、防災グッズ、備蓄の確認など日頃の備えを再確認することとなる。

「臨時情報」も出ず、ある日突然に「その日」が来てパニックになったり、何の備えもできていなくて逃げ遅れたりすることだけでも回避できるとすれば「臨時情報」は相当に有意義と思われる。

しかし、現時点では一般住民には新制度の存在すらほとんど浸透しておらず、現段階のままでいきなり「臨時情報」が出された場合には相当混乱することが目に見えている。

そのうえ、この「臨時情報」は、

- ・情報そのものが、かなり専門的で「確かさ」や「切迫度」がわからなければ避難の判断が難しい。結局は、「とにかく逃げる」と「準備だけはしておこう」の二派に分かれるのではなかろうか。
- ・高齢者や障害者の避難及び学校の授業中止などの判断は、非常に難しいであろう。
- ・県南部と北部などの地域差や各家庭の状況の違いによって対応は大きく異なると思われる。
- ・企業も不確かな情報では経済活動を休止することは困難であろう。
- ・最も難しいのは、不発の場合の防災対応の解除タイミングである。「臨時情報」を出す以上は、その解除情報も示すことが必須であろうと思われる。

政府や自治体の「臨時情報」対応ガイドラインはいずれ示されるであろう。それをわかりやすく周知するとともに、従来の画一的な訓練ではなく、「臨時情報」で想定されるケースごとに自治体ごと様々に工夫された訓練を重ねることが非常に重要と思われる。

また、このような「臨時情報」をベースにした訓練により、必ず来る南海トラフ地震津波への関心が高まるとともに、一人ひとりが「その日・その時」の対応を主体的に考えるようになり「自分の身は自分で守る」自助の意識が醸成され、さらに近助や共助の機運も高まるといった望外な効果が出てくる可能性も期待できるのではなかろうか。

こんなことを言う自分自身、南海トラフ地震に関心はあるが、何故かまだボチボチの気分で本気では備えられずにいる。

☆

○なぜ、自然災害に備えられないのだろうか

阪神淡路大震災および東北大震災の後、多くの人々は繰り返し報道される地震や津波の映像に釘付けになるとともに、自然の破壊力の凄まじさに恐怖を感じなかった人はいなかったのではなかろうか。

その後も全国各地で、地震、洪水、土砂災害、火山噴火、強風・竜巻等々 毎年のように様々な自然の脅威に見舞われている。そして、新聞、テレビなどでその被災状況や長引く避難生活の状況が度々報道されている。さらに、「まさか台風の翌日に大地震なんて」北海道地震直後の地元の人の声のように、「まさか」とか、「今までこんなことはなかった」、「生まれて初めてのことだ」と、突然の自然の襲撃にただただ驚くばかりの声もまた、いつものパターンのように報道されている。人は自然の脅威を知っているはずなのに、多くの人々が何の備えも覚悟もできていなかったように思われる。

「釜石の奇跡」の指導者、片田敏孝教授が東北大震災の前、2003. 5. 26 の震度 5 強の地震直後に、住民の防災意識が非常に強いといわれている宮城県気仙沼市で行ったアンケート調査結果では、地震津波に再三襲われている三陸の人々でさえ、あまり備えができていなかったようである。

報道機関や専門家、行政も繰り返し、災害への備えや訓練の大切さを呼びかけているにもかかわらず、なぜ、人々は自然災害に備えられないのだろうか。

自主防災会のメンバーである自分自身をはじめ、異常自然災害の時代にあって防災への関心は持っていないながらも、なぜか「明日は我が身」と、災害を身近に思えない人が多いようである。まず、備え

られない人のタイプを考えてみた。

タイプ① いつ来るかわからない、切迫感がない、まだ大丈夫。

タイプ② あんな大きな災害は自分には関係ないだろう、自分は大丈夫だ。

タイプ③ わかってはいるが、面倒くさい、忙しいのでそのうちにやるつもり。

タイプ④ そんな怖いこと考えたくない、知りたくもない、知るほど怖くなるだけ。

タイプ⑤ 自分では備えも何もできない、皆に迷惑かけるだけ、どうせ逃げられない、その時はその時でよい。

タイプ①は、関心も知識もある程度はあるが、タイプ③が加わり先送りするタイプだろうと思われる。タイプ②は、いわゆる「正常化の偏見」という心理特性で、心の深いところでは地震への不安はありつつも、備えができないタイプ。

タイプ③は、「正常化の偏見」の表と裏の関係にある。まだ大丈夫、面倒、忙しいのでそのうちにやるつもりなどと、自分を納得させて備えずにいるタイプ。

タイプ④は、何事も直感で判断するタイプで、理性的に考えたり、コツコツと備えるのが苦手なタイプと思われる。やはり「正常化の偏見」の一種なのであろう。

タイプ⑤は、災害弱者、健康を損ねている高齢者など

私自身は、タイプ①と③であろうと思われるが、⑤になるまでにできることから備えておこうと少しずつ準備しているところ。やはりバイアスが働いているのであろう。

以下は、片田教授の言葉。

- ・災害が起きて避難勧告が出て、誰一人として「自分が死ぬ」という状況を想定する人はいないのです。
- ・人間というのは、放っておくと、情報を自分にとって都合のいい方向に捻じ曲げてしまうのです。それは、「嫌なことを考えたくない」という人間の基本的な心理。
- ・災害の本質は、誰にとっても予想もしないことが起こることです。もっと正確に言えば、誰にとっても予想もしたくないことが起こることが災害です。予想もしたくないことだからこそ、備えも怠りがちになります。なぜならば、備えという行動は、起こる事態を想定してとる行動だからです。
- ・平時において災害に備えるという行為は、何もない状態の中で万一の事態を考えて備える行為であるが故に、(避難という行為よりも)さらに高度な理性的行為といえるでしょう。

おわりに、現時点の私の防災対策観

- ・災害とは、「ある日、突然に、想定外」が襲来すること。
備えるとは、非日常的なことを日常化することではなかろうか。
- ・防災対策には「理性」と「想像力」と「根性」と「暇」がいる。つまり、やろうやろうと思いつつも、なかなかできないのが防災対策だろう。また、防災対策に「万全」はない。
- ・少しずつでも日常的に、やれることからやっていくしかなかろうと思っている。